

第11号

発行
H21年1月7日

☆発足十周年記念講演
☆勉強会報告
☆映画上映会
☆第十一回総会報告

6 5 3 1

☆第四回勉強会のお知らせ
☆次回講演会のお知らせ
☆編集後記

6 6 6

発足十周年記念講演

大下 大圓 氏

『生きる意味とこころのケア』

第十回「みえ生と死を考える市民の会」記念講演は、六月一日(日)、三重県総合文化センターの小ホールにおいて開催されました。当日、会場には会員と非会員を合わせ、約三五〇名の方々が参加されました。講演に先立ち、鈴鹿市立神戸小学校の「神部ジュニア・リコーダークラブ」による演奏が行なわれ、澄んだ音色に心が癒されたとの声も聞かれました。その後記念講演が行なわれました。

今回の講師には、飛騨・千光寺住職の大下大圓氏をお迎えしました。大下氏は十二歳で出家し、高野山で阿闍梨位を取得後、スリランカへ留学、得度修行をされました。帰国後、飛騨を拠点に「いのち」のボランティアネットワーク活動、NPOや町づくりの活動、ホスピス運動などを展開されています。円空佛

で知られる千光寺では「こころの研修」を手がけられ、高山市内のクリニックでは医療チームの一員として、患者や家族の精神的ケアにもあたっておられます。

講演では、ご自身が関わってこられた患者のエピソードや、お母様を看取られた経験をもとに、生きるこころの意味についてお話され、多くの方々が熱心に耳を傾けました。

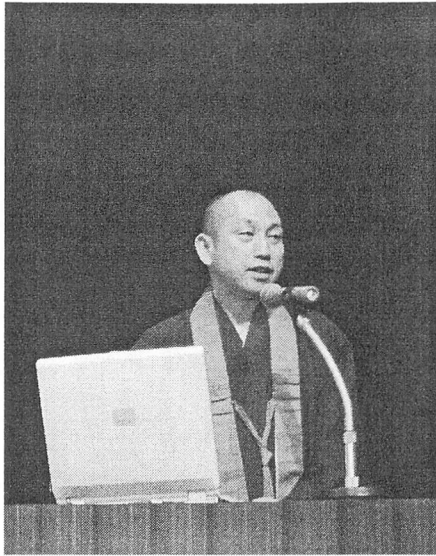
以下に、講演の内容を踏まえて、大下氏ご自身が本誌に寄せてくださった文章を掲載します。ご寄稿いただいた大下氏に、あらためてお礼申し上げます。

加藤真一さん、という私の関わった患者さんがいました。仕事をまじめにこなし、家族とともに自然活動を大切にされた加藤さんでしたが、一九九二年に腎機能低下により人工透析を開始しました。その後に直腸がんの手術をして、療養をしていました。やがてがんが再発しました。抗がん剤も投与されましたが、副作用で吐き気もひどいし、「もうこれ以上は

聞えない」と抗がん剤をやめました。がんの方のケアに関わるということは、どこまでもその人の生きようとするいのちに寄り添って一緒に歩むことなのです。

「ほかになにかご希望はありませんか？」





すると、ちょうど体調がよく、元気なときであったこともあるでしょう。「ああ、山に登りたいなあ。もういつペン山に登りたい」と言われるのです。

加藤さんは、若いころから奥さんなどといっしょによく山に登っていました。思い出のあの山を、最期にもう一度目に焼きつけておきたい、そう言うのです。

ずいぶん悩みましたが、登ることを決めました。西穂高ロープウェイを降り立つと、積雪四メートル、天候は雪が降ったりやんだり、という状態です。体力的にもさうとう衰弱してきていましたから、山登りというより、ただ一歩一歩、ゆっくりゆっくり歩みを進めることしかできません。それでも加藤さんは、一所懸命確かめるように小康状態の雪の中を進みました。

「このへんでもういいよ。十分だ」。雪洞を掘って風よけの場所を造り、用意してきた昼食

をみんなで食べました。加藤さんは、自分たちが元気なころにやってきたことを、最後に挑戦しなかったのです。これで加藤さんの免疫力はおおいにアップしました。

加藤さんが亡くなってからしばらく、奥さんの恵子さんはその悲しみから立ち直れずにいきました。

二月に亡くなって、その夏のことです。私の山行き仲間が北アルプス登山をするにくなり、思い切って恵子さんを誘ってみました。

「山なら行ってもいい」と半分気乗りしない返事でしたが、総勢十五人の他のメンバーは恵子さんの個人的事情を知らないまま、北アルプスの笠ヶ岳に登ることにしました。この笠ヶ岳と谷を挟んで反対側には、加藤さんと一年前に登った西穂高の山がそびえ立っています。

その日は、ガスが立ち込めていて、足元と周辺くらいしか見えません。それはまるで、加藤さんが亡くなって以来、すっかり笑顔をなくしてしまった恵子さんの心のようでもありました。登っている間も、周りからのことばにはふつうに受け答えしますが、自分から積極的なみんなとわいわい騒いだり、笑ったりすることはありません。

ところが……

みんなで山小屋で休憩を兼ねて待機していたところ、

「おい、頂上、見えてきたぞ」

「ガスが晴れたぞ！」



と一斉に声があがります。

「よし、みんな、登るか」

みんなで頂上までいつきに登りきりました。ガスはうそのように晴れ渡っていました。その途上、私はふと気がついて恵子さんに声をかけました。

「奥さん、去年いっしょに山に登った、あの西穂高の山が見えてきたよ」

恵子さんは、はっと西穂高の山に目をやる



やいなや、その頂に向かって合掌しはじめました。
「ああ、そうやね。じゃ、ぼく、般若心経をあげましょうか」
「お願いします」
私は強風の吹き荒れる笠ヶ岳の頂上で般若心経をあげはじめました。その途端、後ろで一緒に唱えていた恵子さんは急にワーツと泣きはじめたのです。それまでずっと、みんな

といっしょにいたけれども、心ここにあらずであったのが、このときに吹っ切れるものがあつたのでしよう。北アルプスの山々に加藤さんの奥さんの叫びがこだまします。

いま、手元に一枚の写真が残っています。

そのあと、笠ヶ岳の頂上付近でみんなで撮った記念写真です。五人の左側に、思いつきり輝いている恵子さんの笑顔がありました。帰り道、みんなで大笑いしながらの、楽しい旅となったことはいまでもありません。

加藤さん、安心してください。奥さんはあなたの思い出とともに、毎日強く生きておられますよ。

勉強会報告

＊＊平成十九年度 第四回勉強会＊＊

がん専門看護師による講演会

「いま、病院では…」

講師 村木明美（済生会松阪総合病院）

中村喜美子（三重大学附属病院）

日時 平成二十年二月十六日（土） 十四時

場所 三重大学医学部看護学科棟

現在がん専門看護師として働く二人が、闘病されている患者さんやご家族の思いについ

て、実際の話を通してわかりやすく語ってくださいました。

講演の後、講師からの「ご家族や大切な人たちと、がんになったときの話を話し合ったことがありますか」との問いかけに、二つのグループに分かれて話し合いました。この日は雪が降り出すような天候に暖房も追いつかない状況でしたが、告知や闘病に関わるお互いの経験や様々な思いについて熱く語られました。「医師の説明イコール告知ではない」、「夫にがんになったときにどうするかと話を向けても、聞きたくない、話したくない、そのときに考えればいい、と逃げられる」、「悩んだ末、夫に告知できなかった」など、つらい経験も語られました。

そして、「家族で話し合うことは大切」、「生きる意欲や生き甲斐を引き出す告知をして欲しい」、「告知の後の関わり方も重要」という、今後につながる意見も出ました。この日参加された皆さま、本当にありがとうございました。（文責 西出りつ子）

＊＊平成二十年年度＊＊

○第一回勉強会

「生死のはざままで悲嘆のケア」

講師 衣斐弘行氏（前鈴鹿龍光寺住職・

鈴鹿国際大学非常勤講師）

日時 平成二十年四月二十七日（日）

十三時～十四時半

場所 三重県総合文化センター

フレンテみえ セミナー室C

衣斐氏は、鈴鹿龍光寺住職の他、鈴鹿国際大学や花園大学などの非常勤講師も務めていらつしやいます。住職としての約二十四年の間に、約六百人の看取りをされたとのことでした。

また、作家としての活動もされており、今回のご講演の中でも、高見順、立原正秋、五木寛之、正岡子規、司馬遼太郎など(敬称略)、たくさんの著名な作家が死についてどのような考えに思っていたか、あるいはどのような死を迎えたかについてもお話いただき、私たちでは知り得ない「作家のある側面」を教えていただきました。

このように、衣斐氏は豊富なご経験をされていますが、数年前に身内の看取りを経験された方でもあります。その過程で、医療者に対する様々な思いや、病人の意思を支えることの大切さや難しさを感じられたようでした。

一方、仏教には「生は人を離すけれど、死は人を結びつける」という言葉があるそうです。生まれたからには必ず死が訪れ、それは人との別れとなる。しかし、人の死を通じて通い合う心も生まれ、そして人と人が繋がり始めることもあるという意味だそうです。人との別れは辛いことですが、人はそれを噛みしめながら、ともに乗り越えていくところに、成長があるのだろくなあと感じた次第です。

ゴールデンウィーク初日の穏やかな日で

したが、久しぶりに心落ち着くお話を聞かせていただきました。また、こんな身近に信頼できる僧侶がいらつしやるのであれば、それは私の駆け込み寺ともなると思い、とても安心できました。

(文責 辻川真弓)

○第二回勉強会

「緩和ケア病棟見学会」

日時 平成二十年十月十八日(土)

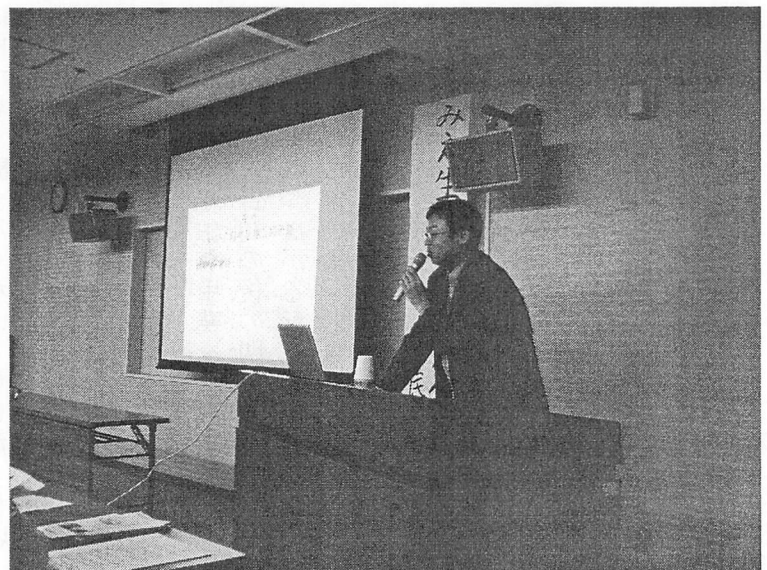
十時~十二時半

場所 松阪市民病院 緩和ケア病棟

三重県がん相談支援センター共催のもと開催され、会員と非会員を合わせ、四十八名の参加者がありました。

はじめに、緩和ケア病棟部長の平野博医師より、ホスピス・緩和ケアについての基本的な考え方や日本国内の緩和ケア病棟数の現状など、緩和ケアについての概要の説明がありました。その中で、平野先生の緩和ケアに対する思いやお考えをお聞きすることもできました。

また、緩和ケア認定看護師の奥山敦さんより、松阪市民病院緩和ケア病棟の紹介が行なわれ、緩和ケアの実際やスタッフの説明、施設内の特徴などを詳しくお話いただきました。



実際の緩和ケア病棟入院費用に関しても、詳しい説明がありました。

講演の最後には、スタッフの人数や勤務体制、平均在院日数などに関して、活発な質疑応答が行なわれました。

その後四つのグループに分かれ、施設を見学させていただきました。新棟の一階にある緩和ケア病棟は、平成二十年一月に開設されました。二十床全室トイレ付のゆったりとした個室で、広い廊下には絵画が飾られ、ベンチも置かれており、とても落ち着く空間づくりがされていました。

食堂には、ご家族の方が調理できるキッチンや、患者さんに人気があるというカキ氷機が置いてあるなど、患者さんの食の楽しみを増やす工夫がされていました。また、病室からそのまま病棟のお庭に出ることができ、お部屋やご家族が宿泊することも可能な家族控室（有料）、特別浴室などもあり、とても充実していました。

講演、病棟見学を通して、あらためて、静かに自分を見つめ自分らしい生活を送るとはどういうことを考える機会になったのではないかと思います。



平野先生、奥山さんをはじめ、松阪市民病院緩和ケア病棟の皆様、貴重なお時間をとっていただき、ありがとうございました。

（文責 種田ゆかり）

○第三回勉強会

「いのちに限りがあると気づいたとき」

講師 久田邦博氏

日時 平成二十年十二月二十日（土）

十四時～十五時半

場所 三重県総合文化センター

特別会議室

久田氏は、製薬会社の会社員として勤務されながら、様々な場でコミュニケーション・スキル等の講師としてご活躍されています。今回は、ご自身の闘病生活についての体験を、一、がんの疑いからの心境の変化、二、どのように気持ちを切り替えたか、という、主に二つのテーマに即してお話くださいました。患者としてどのように疾患を受容し、今どのような思いで日々の生活を送られているのか、語られた内容は深く、胸を打つものでした。

とても難しいテーマでしたが、講師のお人柄により、勉強会終了時には会場に温かい雰囲気満ち、参加者各自が自分の人生を顧みるよい機会となりました。

（文責 平松万由子）

◆「終わりよければすべてよし」上映会◆

日時 平成二十年一月二十七日（日）

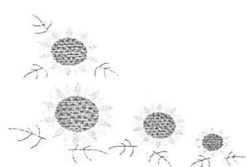
十四時、十八時（二回上映）

場所 伊勢市生涯学習センター「いせトピア」多目的ホール

羽田澄子監督の映画「終りよければすべてよし」の上映会を昨年津市で開きました。この映画は、日本、オーストラリア、スウェーデンの、それぞれ先進的な「現場」を訪ねることによって、終末期医療のあり方、とくに在宅医療はどうあるべきかを問いかけるものです。

南勢地域でも上映して欲しいとの希望の声が多く、それに応えて伊勢市において上映会を開催しました。

映画を観て終わるだけでなく、自分や家族の「最期の過ごし方」についても考える機会にするため、上映後に「懇談会」も開きました。



第十一回総会報告

日時 四月二十七日(日)

場所 三重県総合文化センター

1. 会長あいさつ(大西)

2. 総会の司会指名(遠藤)

3. 平成十九年度活動報告(辻川)

4. 平成十九年度決算報告(平松)

収入 1,795,119 円

支出 798,034 円

差引残高 997,085 円(次年度繰り越し)

5. 平成十九年度会計監査報告

(会計監査 森多佳美氏、町本実保氏)

6. 規約の改正

活動の実情に合わせ、規約の改正案が提出された。

第五条(役員の構成)

副会長と幹事をそれぞれ一名から二名にする。

第七条(機関)

第三条で定めた事業について必要に応じ企画・立案し、運営委員会の承認を経て実施する機関として、新たに「実行委員会」を定める。

7. 役員の承認

(新役員) 幹事 喜田園子氏

書記 藤岡史佳氏

(新運営委員) 北村周子氏

奥山 敦氏

8. 平成二十年度活動計画案(辻川)

9. 平成二十年度予算案(平松)

収入 1,647,085 円

支出 1,647,085 円

* 以上について、資料に基づき報告がなされ、すべて承認されました。

♪ 第四回勉強会のお知らせ

「語り合いの会」

今年度最後の勉強会は、医療に関する日頃の悩みを語り合い、また情報交換をする場にしようかと企画しました。手作りのお菓子とお茶もご用意する予定です。

日時 平成二十一年二月二十二日(日)

十四時～十六時(十三時半受付開始)

場所

三重県総合文化センター

フレンテみえ 生活工房

♪ 次回講演会のお知らせ

日時 平成二十一年七月十八日(土)

十三時～十五時

場所 三重県総合文化センター

フレンテみえ 多目的ホール

(津市一身田上津部田)

演題 「小児科医が考える生と死」

講師 細谷亮太氏(聖路加国際病院・副院長)

編集後記

明けましておめでとうございます。会員の皆様、新しい年をいかがお過ごしですか。

本会では活動のさらなる充実を目指して、昨年度から様々な取り組みを始めています。

昨年度に続き、映画の上映会や、鈴鹿市の「風の街の文化祭」での「医療相談コーナー」を実施しました。また、鈴鹿市民会館で行われたミュージカル「火の鳥」(わらび座鈴鹿公演実行委員会主催)を後援し、話し合いが中心の勉強会も始めました。

これら活動内容の変化にあわせ、「ご案内」を四月にリニューアルしました。



今後の活動についてアイデアやご希望があれば、事務局にお寄せください。可能であれば、活動に反映させていきたいと考えております。また、会費を納入されていない方、一月中の納入をお待ちしております。

本年も、どうぞよろしく願っています。

(編集委員 今泉、西出)